

平成 22 年度海外研修派遣報告書

公立置賜総合病院 鈴木 亜由美

私が海外研修派遣に参加した目的は、世界の最先端であるスタンフォード大学での最新の技術にふれてみたいということであった。また、機会があれば専門とする乳がん診療について米国の現状を知りたいと思ったからである。講義では、Molecular Imaging, High Field Neuro MRI などの最新の研究や技術の紹介があり、多くの施設見学もあった。施設見学では、設備の充実とその規模の大きさに驚くばかりであった。今回は、Debra M. Ikeda, M.D. の Breast MRI についての講義があった。米国でも日本と同様に MRI biopsy ができる施設が少ないのもっと増やすべきだということを強調されていた。米国の乳がん診療の現状を少し垣間見たように感じた。しかし、実際に乳がん診療に携わる臨床の現場に触れることができなかったのが残念であった。

放射線診療における米国との違いについて考えると、大きな違いはやはり徹底した専門技師制度ではないかと思った。モダリティ別に分業されているとは聞いていたが、どのモダリティでもこなす日本の放射線技師とは違い、専門分野ごとに分かれていた。放射線技師としての教育を終え、その後に CT, MRI, 核医学などの専門技師資格取得のためのプログラムを終了し、試験に臨む。ほとんどのモダリティが専門技師の資格を必要とする状況であった。日本でも、専門技師認定の制度が拡がりつつある。日本では、米国のように完全な分業制になるとは考えにくい、医療の高度化に伴いそれに近いシステムに発展していくのであらうと思った。

Moseley 先生の講義はいくつかあったが、なかでも MR-HiFU (HiFU: High Intensity Focused Ultrasound) の話題が一番印象に残った。MR-HiFU は超音波ガイド下で行うよりも空間分解能が高く、効果がリアルタイムに確認できる。乳腺や肝臓、筋肉や前立腺の腫瘍に適応し、現在臨床試験中ということだった。MR のみでの診断と治療が可能になるということは、現在の画像診断という役割から診断と治療への発展をもたらすであらうと感じた。

今回の研修では、世界トップレベルの施設の見学や講師の先生方の貴重な講義など得るものがたくさんあった。米国らしい合理的な放射線診療のよいところも多くあったが、あらゆるモダリティをこなす日本の放射線技師は、画像診断に関する幅広い知識を持っていて、総合的には米国の技師より優れているのではないかと感じた。その日本の放射線技師の制度を活かし、幅広い視野を持って今後の研究に取り組んでいきたいと思う。そしてなによりも、今回参加した 20 名の仲間たちから多くの刺激をもらった。研究や日常業務に取り組む姿勢、高い志を持った方々に出会えたことは、私にとってすばらしい財産となった。

最後になりますが、今回の研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会ならびに Stanford 大学、バックアップしていただいた GEHC-J の皆様、代表として日々尽力された九州大学 西川団長、そして本研修参加に協力していただいた当院放射線部の皆様に深く感謝申し上げます。



Debra M. Ikeda, M.D. と講義室にて